

2015年電磁波過敏症と化学物質過敏症に関する

ブリュッセル国際科学決議

ベルギー、ブリュッセル市、王立医学アカデミーで2015年5月18日に開催された第5回パリ・アピール会議の結果

アメリカのアレルギー学者、セロン・G・ランドルフのパイオニア的な仕事を想起すること。現在、一般的に化学物質過敏症と呼ばれる病気について、1962年に初の臨床的記述を行い、私たちはその恩恵を受けている。

アメリカ環境保護庁の要望で1992年に開かれた化学物質過敏症に関する科学的ワークショップを想起すること。

WHOのテクニカル・リポート「環境衛生基準137：電磁場(300Hz～300GHz)」を想起すること。それは、ジェノバ市で1993年に世界保健機関と国際放射線防護協会、国連環境プログラムの共同後援で発表された。

ドイツのベルリン市で1996年2月21～23日に開催された化学物質過敏症に関する国際ワークショップの報告書を想起すること。

デンマークのオーフス市で1998年6月25日に採択された、環境問題における司法への権利と意思決定での公的参加と情報へのアクセスに関する、ヨーロッパの国連経済委員会(UNECE)協議会を想起すること。

オーストリア、グラーツ市で1998年9月19～20日に開かれた電磁場と非特異的健康症状に関する国際ワークショップ COST244 を想起すること。

アメリカ、湾岸戦争時の化学物質曝露の健康影響に関する1999年国立衛生研究所アトランタ会議に続いて採択された、多種化学物質過敏症に関する1999年合意を想起すること。

UNESCOパリ本部で2004年5月7日に宣言された、化学的汚染によって起きた病気に関するパリ・アピール国際決議を想起すること。

トルコのイスタンブールで2004年6月9～10日に開催された、電磁場被曝に対する子どもの過敏性に関するWHOワークショップを想起すること。

カナダのオタワ市で2005年7月11～13日に開催された、科学的に不確かな分野における公衆衛生政策指導に関するWHOワークショップを想起すること。

2005年12月に発表された、WHOファクトシートNo.296「電磁場と公衆衛生：電磁的過敏症」を想起すること。

「環境過敏症の医学的展望」と題されたマーガレット・E・シアーズの報告書

を想起すること。それはカナダ人権委員会のために作成され、2007年5月に発表された。

バイオイニシアティブ報告 2007年版、2012年版、2014年版の「電磁場（極低周波と無線周波数）のための生物学に基づいた公衆被曝基準の論理的根拠」を想起すること。

2009年4月2日の欧州議会決議「電磁場の健康不安」を想起すること。

2009年11月17～21日にノルウェー、セレタン市で開催された、「電磁場健康リスクに関する科学的パネル：合意ポイントと勧告、論理的根拠」を想起すること。

2011年5月13日のMCSとEHSを環境病として認め、それらを国際疾病分類ICD-10（訳注：正式名称は疾病及び関連保健問題の国際統計分類で、各国から集計された死亡や疾病データの解析を行うためにWHOが作成した。最新版は1990年に採択されたICD-10で、現在ICD-11の策定作業が進んでいる）に含めることを求める、WHO本部での科学者とNGOの会議を想起すること。

MCSとEHSのためのICD基準を得るために、この会議に続いて、WHOでつくられた仮想プラットフォームを想起すること。

2011年5月27日に採択された欧州評議会議員会議の決議No.1815「電磁場の潜在的危険性と環境におけるそれらの影響」を想起すること。

1996年にWHOで始められた国際電磁場プロジェクトの進捗報告書2013年6月～2014年を想起すること。

2014年10月のWHOファクトシートNo.193「電磁場と公衆衛生：携帯電話」を想起すること。

2015年5月11日の、最近の国際的電磁場科学者-電磁場と無線技術からヒトと野生生物を保護するための国連へのアピールを想起すること。

化学的環境と電磁場環境が世界的に悪化していることを考慮すると、いわゆる電磁波過敏症(EHS)や多種化学物質過敏症(MCS)は、発展途上国と同様に先進国に影響を与える、急増している世界的健康問題である。

私たち、ヒポクラテスの誓いに従って行動する医師と、科学的真実の名において行動する科学者、世界中の異なる国で働く全ての医師と研究者は、十分に独立性のある見解として、下記のようにここに宣言する：

- ・世界中でEHSとMCSに苦しむ人たちが大勢おり、増え続けていること。

- EHS と MCS は女性、男性、子どもに影響を与えること。
- 電磁場とさまざまな化学物質の有害な健康影響に関する、現在入手可能な、専門家の審査を受けた科学的証拠に基づいて、そして、患者の臨床的、生物学的研究に基づいて、EHS は電磁場への被曝に、MCS は化学物質曝露に関わる。
- 電磁スペクトラムの多くの周波数（極低周波電磁波だけでなく、無線周波数とマイクロ波周波数）と、多様な化学物質は、それぞれ EHS と MCS の発症に関わる。
- 病気の引き金は、急性的で非常に高い強度の曝露または慢性的な非常に低い強度の曝露かもしれないし、回復は人為的に発生した電磁場と化学物質のレベルが少ないことで特徴づけられる、自然な環境で得られるかもしれない。
- 現在の症例対象疫学研究と EHS または MCS を再現することを目指した誘発研究は、構成するのが科学的に困難で、現在の研究デザインの欠点のせいで、因果関係を立証するまたは反証するには実際に不適切だ。とくに、客観的含有・除外基準と終点での評価基準はもっと明確に定義される必要があるからだ。そして、電磁場と化学物質への反応は極めて個人的で、被曝パラメータの多様性によって決まるからだ。最後に、試験状況は、しばしば信号対雑音比を減らすので、潜在的な影響の証拠をあいまいにするからだ。
- ノセボ効果（訳注：思い込みによってマイナスの影響が出てしまうこと、プラシーボ効果の逆）は、盲研誘発研究の科学的価値を考える時に、適切でも論理的に妥当な説明でもない。客観的生物学的指標が動物実験と同様に、患者でも検出されているからだ。
- 臨床的診断と生物学的診断、信頼できるバイオマーカーの使用を含む EHS と MCS のモニタリングのための新しいアプローチがわかってきている。
- EHS と MCS は、病理学的状態に関わる同一の過敏性のうちの2つの側面かもしれない。そしてこの状態は健康、職業、家族生活に深刻な結果をもたらすかもしれない。
- 最後に、EHS と MCS は、従って、ヒトの健康に責任を負う国際的、国家的研究機関によって十分に認められるのが当然である。

私たちの現在の科学的知見の見解において、私たちは従って、全ての国家的、国際的組織と研究機関に、とりわけ世界保健機関(WHO)に対し、EHS と MCS を、世界中、つまり無線技術による電磁場と市場で流通する化学物質を無制限に利用させる全ての国々に近い将来訪れる、重要な公衆衛生の懸念をつくる可能性

のある「歩哨病」として作用する、真に医学的な状態として認めることを迫る。

何も行動しないことは社会に対するコストになり、これ以上、選択肢にはならない。

私たちの科学的知見はまだ完全になっていないが、あらゆる国際的なレベルでこの状態を緊急に認めることを求める、公衆衛生に対する深刻な危害の原因であることを満場一致で認める。将来この全世界的な流行に直面するために、重要な準備的予防対策が採用され、優先順位をつけられ、発症者が採用された診断ツールや革新的治療などによって利益を受けられるようにするためだ。

化学物質におけるヨーロッパの登録・評価・認可(REACH)規制の適用で化学物質の場合にしなくてはいけないように、現在の科学的知見に従い、予防原則を考慮して、化学物質と無線技術の使用に関する本当の情報を市民が入手できるようにすること、そして予防原則に則った規制対策が特に子どもたちと傷つきやすい人々のために適用されることを、私たちは満場一致で勧告する。

これらの目的を達成するために、電磁場と化学物質のリスクを評価するために立案された制度化された委員会が明確な科学に基づいた独立性をもって活動する科学者達によって構成され、業界に加盟するあらゆる専門家を除外することを私たちは満場一致で要求する。

私たちは従って、この危機的な環境衛生問題に気づき、緊急に責任を果たすべき全ての国家的、国際的団体と研究機関、もっとはっきりと言うと、世界保健機関に対し、EHS に関する 2005 年と 2014 年の WHO の見解を更新し、EHS と MCS を WHO 国際疾病分類 (ICD) の一部として認めることを求める。それは一定の基準の下で MCS を分類した日本やドイツで既に先行的な事例であるからだ。医学的団体による認知を高めるために、政府、政治家、一般市民による認知を高めるために、EHS と MCS は WHO の ICD の下で個別の基準で表現されるべきだ。それは、これらの病理学的な症候群を得て人口における調査を促進するために、そして有効な医学的予防対策と治療について医師を訓練するためだ。

署名

イゴール・ベルヤレフ、医学博士、科学博士、スロバキア共和国、スロバキア科学アカデミー、がん調査研究所、放射線生物学

ドミニク・ベルボン、医学博士、科学修士、フランス、パリ大学病院、腫瘍学教授、ブリュッセル、ヨーロッパがん環境調査研究所 (ECERI)

エルネスト・バージョ、医学博士、小児化医、イタリア、環境に関する国際医学会(ISDE)

科学委員会、ブリュッセル、ヨーロッパがん環境調査研究所 (ECERI)
クリスティン・カパナック、哲学博士、フランス、ガンに対する調査治療協会(ARTAC)、
ブリュッセル、ECERI
デビッド・O・カーペンター、医学博士、アメリカ、ニューヨーク大学アルバニー校、
衛生環境研究所
ヤノス・フリューヘリング、医学博士、ブリュッセル、ベルギー王立医学アカデミー、
名誉永久代表、核医学教授
ユーリ・グリゴリエフ、ロシア、非電離放射線防護ロシア国立委員会、DMedSc
レナート・ハーデル、医学博士、スウェーデン、オレブロ、大学病院、腫瘍学者
マグダ・ハヴァス、医学博士、カナダ、トレント大学、環境・発生源学助教授
ジーン・フス、ルクセンブルグ、NGO AKUNT 創設者、ルクセンブルグ議会と欧州評
議会の名誉議員
フィリップ・イリガリー、医学博士、生物化学の科学博士、フランス、がんに対する調
査治療研究所(ARTAC)、ブリュッセル、ECERI
エリザベス・ケリー、アメリカ、アリゾナ株式会社、電磁的安全性アライアンス
マイケル・クンディ、医学博士、オーストリア、環境衛生研究所、公衆衛生センター、
ウィーン医学大学教授
ピエール・レ・ルズ、医学博士、フランス、クリーレム
フィリップ・マイケル、医学博士、IDEA 名誉代表、アイルランド、IDEA
S.M.J. モルタザヴィ、医学博士、イラン、電離・非電離放射線防護調査センター、科学
主任、シラーズ医学大学物理学教授
ヨアキム・ムッター、医学博士、ドイツ、環境衛生センター
エンリケ・A・ナヴァロ、医学博士、スペイン、ヴァレンシア大学、応用物理学・電磁
学部教授
ペーター・オーンソルゲ、医学博士、ドイツ、ヨーロッパ環境医学アカデミー
ウィリアム・J・レイ、医学博士、FACS、 FAAEM、アメリカ、テキサス、ダラス、環
境医学センター
ロベルト・ロミズィ、医学博士、イタリア、環境国際医学会 (ISDE)
シンディ・セイジ、文学修士、アメリカ、バイオイニシアティブ報告共著者
シリル・スミス、医学博士、DIC、イギリス、サルフォード大学
ルイス・ヴァンデラック、医学博士、カナダ、ケベック大学モントリオール校、CINBIOSE、
研究者、環境科学研究所、教授
アンドレ・ヴァンダー・ヴォルスト、医学博士、ベルギー、マイクロ波研究所名誉教授

出典：<http://appel-de-paris.com/>

訳：加藤やすこ、2015.12.19